

# 南インドにおける成道図の図像表現

——満瓶をてがかりとして——

佛教大学総合研究所特別研究員

中 西 麻一子

## はじめに

インド古代初期の仏教美術では、ゴータマ・ブッダの一生涯における成道の出来事を、菩提樹や菩提樹供養によって成道図とする作例と、菩提樹座や菩提樹堂を中央に配し、その周囲に魔や魔衆などを表すことで降魔成道図とする作例が見られる<sup>1</sup>。やがで、ガンダーラ地域（紀元後二世紀頃）で仏伝図の制作が本格化すると降魔成道図によって成道を表すことが定着する<sup>2</sup>。それに対して、南インドにおける最初期の仏教美術（紀元前一世紀－紀元後三世紀頃）では、降魔成道図のみならず、降魔図と成道図とそれぞれ個別の作例が散見されるうえ、仏伝三相図に成道図を組み込んだ作例も見られる。そこで本研究では、この南インドで図像化された成道図に着目し、その図像表現を文献資料に基づいて分析することで地域的な特徴を明らかにしたい。

## 1. インド古代初期の成道図

現存最古の成道図には、パールフット塔（シュンガ朝：紀元前 150 年頃）の南門屈曲欄楯（Prasenajit Pillar, P 29）の上段区画が挙げられる<sup>3</sup>。次いでサーンチャー第一塔（サータヴァーハナ朝：紀元後一世紀初）では、降魔成道図と比定される六例のうち東門第三横梁正面の図像表現に南インドへと継承される成道図のモチーフが見られる<sup>4</sup>。

サーンチャー第一塔東門第三横梁正面の浮彫（図 1 を参照）は、Schlingloff

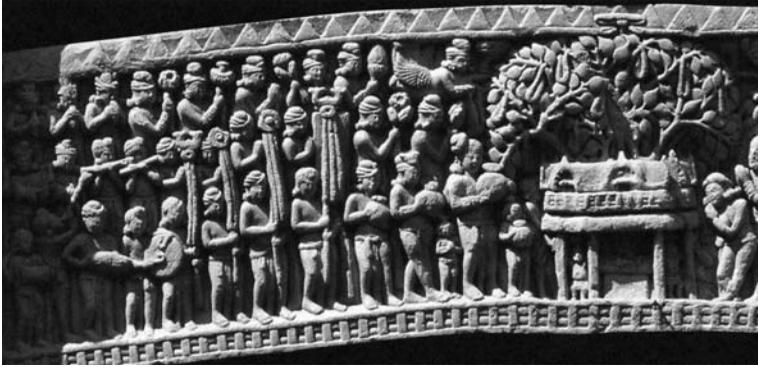


図1 降魔成道図 サーチー第一塔東門第三横梁正面（左半分）

(1988: 6-7)、宮治昭(2010: 307-309)によって降魔成道図であることが解明されている。中央には、パールフットと同じく菩提樹を取り囲んだ建造物(菩提樹堂)を配置して、その左側に成道を讃嘆・祝福する神々の姿が描かれている。神々は三段に整列し、姿勢を中央の菩提樹堂に向けている。太鼓や笛によって合奏している神々が後方に、のぼりを掲げている神々が中央に、そして先頭には壺を胸に抱えた四人の神々が菩提樹堂の直ぐ傍らに立っている<sup>5</sup>。次節では、この壺の表現が顕著に見られる南インドの成道図を考察する。

## 2. 南インドの成道図と蓮華入りの壺(満瓶)

アマラーヴァティー大塔出土の仏伝三相図(サータヴァーハナ朝: 紀元後二世紀)は、縦に三段の区画があり、下段に菩提樹による成道図、中段に法輪による初転法輪図、そして上段に仏塔による涅槃図が象徴的に表されている(図2を参照)。本研究で取り上げる成道図の菩提樹下にはブッダの存在を暗示する空の椅子があり、その両脇に蓮華入りの壺を掲げた男性と女性が立っている。菩提樹上方の両側には、天人が片手に鉢を持ち、散華する姿がサーチーと同様に見られる。Knox(1992: 163)は、この男性の掲げる壺がプールナガタという蓮華入りの壺であると解説している<sup>6</sup>。このプールナガタ(Skt.

*pūrṇaghaṭa* or *pūrṇakumbha*、Pā. *pūrṇaghaṭa*) は、漢訳では満瓶、そして音写の本囊伽吨<sup>ほんながた</sup><sup>7</sup>とも記される。その他、同じ壺の形状を指して賢瓶<sup>8</sup>、宝瓶、如意瓶とも記されるが、本研究では最も一般的に使用される満瓶と記すことにしたい。

南インドでは、このような満瓶が描き込まれる成道図の図像表現が十例ほど現存する(表1を参照)<sup>9</sup>。満瓶を持つ人物の数や動作には変化が見られ、特にチャンダヴァラム大塔出土の成道図では、向かって左側の男性が両手で蓮華入りの満瓶を斜めに傾け、満瓶の中の水を空の椅子に注いでいる(図3を参照)。それに対して、カナガナハリ大塔出土の上段レリーフ石板 No.12(図4を参照)は、上段と下段の両区画を使用して、蓮華入りの満瓶を持つ神々が菩提樹下の空の椅子を取り囲み、その中にはその満瓶を頭部より上に高く掲げている女性達の姿も下段区画に見られる。

この満瓶の造形自体は、インド古代初期美術段階より仏塔の欄楯に頻繁に彫り出されているが<sup>10</sup>、南インドではさらに発達し、巨大な満瓶のみを描いた石板も制作されている(表2を参照)。アマラーヴァティー大塔から出土した巨大な満瓶の表面には花綱や円盤飾りによる装飾が施され、底部には波状のうねりのある葉文が描かれている(図5を参照)<sup>11</sup>。そして満瓶の細い口頸部を通じて開口より多くの蓮華や蕾が四方に溢れ出し石板の上部を埋め尽くしている<sup>12</sup>。これら巨大な満瓶を描いた石板も「Big *Pūrṇaghaṭa*<sup>13</sup>」や「*Pūrṇakumbha*<sup>14</sup>」と題される。同石板の配置場所につ



図2 仏伝三相図 アマラーヴァティー大塔出土(表1-2)

表1 南インドにおける成道図一覧

	出土地	所在(現所在地)	年代	出典
1	カナガナハリ (図4)	上段レリーフ石板 No.12	サータヴァーハナ： 2世紀	AND 科研. 68. MASI-106. XCII.A.B.
2	アマラーヴァティー	ロンドン、大英博物館： BM 74.	サータヴァーハナ： 2世紀	Knox. Pl. 63.
3	アマラーヴァティー	ロンドン、大英博物館： BM 93.	サータヴァーハナ： 2世紀	Knox. Pl. 88.
4	アマラーヴァティー	ロンドン、大英博物館： BM 94.	サータヴァーハナ： 2世紀	Knox. Pl. 89.
5	アマラーヴァティー (図2)	アマラーヴァティー考古 博物館	サータヴァーハナ： 2世紀	全集 13. 図版 110.
6	アマラーヴァティー	ムンバイ、チャトラパテ イ・シヴァジ・マハラジ ・ヴァストゥ・サンクラ ハラヤ博物館：S 66.	サータヴァーハナ： 2世紀	現地撮影(2020年2月)
7	アマラーヴァティー	アメリカ合衆国、クリ ブランド美術館：1970.43.	サータヴァーハナ： 2世紀	Heeramaneck (1979) B& W No.7.
8	アマラーヴァティー	線画	サータヴァーハナ： 2世紀	Burgess. Pl. 32, 3.
9	チャンダヴァラム (図3)	テランガーナ州立考古博 物館：Acc. No. 229.	サータヴァーハナ： 2世紀	現地撮影(2019年2月)
10	アーンドラプラデー シュ州	ニューデリー国立博物 館：Acc. No. M 17/1.	サータヴァーハナ： 3世紀	現地撮影(2019年2月)



図3 成道図 チャンダヴァラム大塔出土(表1-9)

いては、Shimada (2013: 110–112) が、アマラーヴァティー出土の仏塔図に基づき、仏塔覆鉢部の装飾として彫り出され、これら複数の巨大な満瓶が連続して仏塔覆鉢部を円環していた可能性があることを指摘している。さらには、同様に「Pūrṇaḡaṭa<sup>15</sup>」と題された満瓶の立体彫刻（高さ 31 cm）がナーガールジュナコンダ（イクシュバーク朝：紀元後三世紀）から出土しており、石灰岩を彫り出して制作された満瓶の開口部には、蓮弁の文様が施されている（図 6 を参照）<sup>16</sup>。

以上の図像資料から満瓶そのものは、大きさや蓮華の有無にかかわらず、細い口頸部のある壺の形状から満瓶であると解釈されてきたことが判明した。そしてこの満瓶の表現が南インドでは特に好まれ、欄楯の装飾文様に留まらず、仏塔覆鉢部の装飾や成道図の図像表現にも用いられたと理解出来る。また成道図では、神々が満瓶を頸部や頭上まで持ち上



図 4 成道図 カナガナハリ大塔出土 上段レリーフ石板 No.12 (表 1-1)

表 2 大きな満瓶図一覧

	出土地	所在（現所在地）	年代	出典
1	アマラーヴァティー （図 5）	チェンナイ州立博物館： Acc. No. 190.	サータヴァーハナ： 1 世紀	現地撮影（2019 年 2 月）
2	アマラーヴァティー	アマラーヴァティー考古 博物館	サータヴァーハナ： 2 世紀	全集 13. 挿図 109.
3	アマラーヴァティー	コルカタ・インド博物館	サータヴァーハナ： 2 世紀	現地撮影（2020 年 2 月）
4	チャンドヴァラム	テランガーナ州立考古博 物館：Acc. No. 238.	サータヴァーハナ： 1 世紀	現地撮影（2019 年 2 月）
5	ナーガールジュナコ ンダ （図 6）	ニューデリー国立博物館 Acc. No. 50.26.	イクシュバーク： 3 世紀	現地撮影（2019 年 2 月）



図5 大きな満瓶図 アマラーヴァティー  
大塔出土（表 2-1）



図6 満瓶の立体彫刻 ナーガールジュナ  
コンダ出土（表 2-5）

げて掲げた後に、その満瓶の水を空の椅子に注ぐという一連の所作も明らかとなった。次節では、この満瓶という用語について、文献資料における記述を整理し、成道図に満瓶が描き込まれた背景を検討していきたい。

### 3. 文献資料に基づく満瓶の解釈

前節で確認した満瓶の図像表現については、Bosch（1960：110-113）や Agrawala（1965）をはじめ安藤佳香（2003：244-252）による論考などがあり、様々な満瓶をタイプ別に集成し、分析がなされている。満瓶の開口からは蓮華のみならず、ラクシュミーや柱などが生じる作例も見られることから、あらゆるものを生み出す豊穰多産の象徴として理解されてきた<sup>17</sup>。それに対して文献資料では、パーリ語の用例から Morris（1884）が、祭りの装飾に関連して言

及されることを指摘する。そのことは『ディーパヴァンサ（島史）』の第6章第64–66詩節で、アショーカ王が僧団に布施する際に、都中で太鼓を打ち鳴らさせ、道路を清掃させ、花綱、アーチ門、バナナの樹とともに美しい満瓶を設置させて (*punnaghaṭam subhaṃ thapayantu*)、飾り立てたという記述に基づいている<sup>18</sup>。類例は、『ダンマパダ』第17詩節を註釈する『ダンマパダアッタカター』において、デーヴァダッタの死に対し、大衆が歓喜して大祭を行った際の記述が挙げられる。

*paṭhaviṃ pavitṭhe pana devadatte mahājano haṭṭhatuṭṭho dhajapatākā kadaliyo  
ussāpetvā punnaghaṭe thapetvā, 'lābhā vata no' ti mahantaṃ chaṇaṃ anubhoti.  
Dammaṃpadāṭṭhakathā, Devadattassavatthu (Dhp-a I, 149, 11–13)*

また、デーヴァダッタが大地に入ったとき、身の毛を逆立てた大勢の人々が、複数の幟と旗、バナナの樹を高くかかかけて、複数の満瓶を置き、「実に（デーヴァダッタの死は）我々の利得である」と、大きな祭を享受する。

他方、サンスクリット語では、PW (s.v. *pūrṇakumbha*<sup>19</sup>) に非常に興味深い古代インド語文献の用例が登録されている。Gavāmayana という祭式の最後から2日目に行われる Mahāvratā を話題にする『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』(JB 2.405–405)<sup>20</sup>、『アイタレーヤ・アーラニヤカ』(AĀ 5.1.1)、『シャーンカーヤナ・シュラウターストラ』(ŚāṅkhŚS 17.14.13)において、満瓶が Mārjāliya 炉という祭式道具を浄める場所で使用されているのである。特に『アイタレーヤ・アーラニヤカ』(AĀ 5.1.1–3)では、女性たちが言葉を発しながら満瓶を掲げて Mārjāliya 炉を3回周回した後に<sup>21</sup>、祭式の場所の3箇所（天界の水となった）満瓶の水を注ぎ、祭場と道具を浄めることが述べられる<sup>22</sup>。古代インド語文献における満瓶の取り扱いに関しては、さらなる調査が必要になるが、このような事例に基づく満瓶の本質には、天界の水によって不浄を取り除くという性格が十分に含まれると考えられる。

すなわち『ディーパヴァンサ（島史）』や『ダンマパダアッタカター』の該

当箇所にも満瓶が記される要因には、満瓶が本来持つ不浄の除去という効果のためであったと言えよう。以上の満瓶についての理解を踏まえて、次に仏伝文学にも満瓶がどのように記されているかを考察する。

#### 4. 仏伝文学に記される満瓶

仏伝文学における満瓶の記述は、(1) 誕生の直前場面、(2) カーラ龍王の讚嘆場面、(3) 魔の敗退場面の三場面であり<sup>23</sup>、成道場面に直接的な表現は見られない。そのうち(2)は、成道の前兆や瑞相をあらわす現象の一つとして満瓶が『ラリタヴィスタラ』<sup>24</sup>、『マハーヴァストゥ』<sup>25</sup>、『佛本行集経』<sup>26</sup>などに記される<sup>27</sup>。(3)は、成道場面と最も関連すると考えられるが、満瓶は地神の持ち物として『過去現在因果経』などに記されており<sup>28</sup>、対応する図像資料も遅れてサールナート(紀元後五世紀)<sup>29</sup>やエローラ第11窟(紀元後七-八世紀)<sup>30</sup>に満瓶を持つ地神の姿が看取されるため、先に制作されていた成道図の影響を受けて成立した可能性がある。そこで本節では(1)を取り上げ、その内容から仏伝文学において満瓶がどのように取り扱われているかを検討したい。

満瓶は、『ニダーナカタール』(ジャータカ註釈文献・序説)に物語られるシッダールタの誕生直前の箇所にも記される。仏母マーヤーが、シッダールタの出産のためにカピラヴァストゥから故郷デーヴァダハへと向かう道路について、次のように説かれている。

*“icchāṃ’ ahaṃ deva kulasantakaṃ Devadahanagaraṃ gantun” ti. rājā  
“sādhū” ’ti sampāṭicchitvā Kapilavatthuto yāva Devadahanagarā maggaṃ  
samaṃ kāretvā kadalipunṇaghataḥajapaṭākādīhi alaṃkārapetvā devīm sovaṇ-  
ṇasivikāya nisīdāpetvā amaccasahassena ukkhipāpetvā mahantena parivārena  
pesesi.*

*Jātakatthavaṇṇanā*, Nidānakathā (Jā i, 52, 10–14)

(仏母マーヤー)「王様、私は、一族のいるデーヴァダハの都に行きたいのです」と。王は「よろしい」と承諾して、カピラヴァストゥからデーヴァダハの都までの道を、平らにさせて、バナナの樹、満瓶、旗、幡などで飾らせて、王妃を黄金の駕籠に坐らせ、千人の大臣たちに担がせて、大勢の従者ととも送った。

同じ箇所に対応経は、『佛本行集経』巻第二「発心供養品第一 中」[T. 3, No.190, 662 a 1-21]に見出され、満瓶について詳述される<sup>31</sup>。

「王、夫人の是の如き語を聞き已りて、即ち勅を出し、城内の大臣、及び諸の豪富、長者、居士、商賈人に告げて言く。「我、今、夫人を園林に出だし、觀看遊戯せしめんと欲す。汝等、當に家を各の莊嚴し、城内の街衢を悉く清淨せしむべし。有つ所の穢惡、瓦礫、糞堆、並びに宜しく除却すべし。香湯を辦具して、道に灑散し、香泥を地に塗り、妙香華を以て其の上に布散し、處處に妙寶の香罇を安置して、衆なる名香を焼せん。又復た、種種の寶瓶を安置し、諸の香水を盛り、好淨花なる優鉢羅華、波頭摩華、拘勿頭花、分陀利華を著して瓶内に置き、處處に芭蕉之樹を安置せよ」

『佛本行集経』[T. 3, No.190, 662 a 6-15]

『佛本行集経』では、穢惡、瓦礫、糞堆などの不淨物を除去し、道路を清淨にして飾り立てたことが明示されており、そのことは不淨を取り除くという満瓶の本質と合致する。このような『ニダーナカター』（紀元後五世紀）、『佛本行集経』（紀元後 523-600 年訳出）の内容は、前節で取り上げた『ディーパヴァンサ（島史）』（紀元後四世紀後半）や『ダンマパダ・アッタカター』（紀元後五世紀頃<sup>32</sup>）と類似し、いずれも王（アショーク王・シュッドーダナ王）の命令や大衆が行う大祭によって実施されたことから、当時（下限は該当文献制作時）の世俗的な慣習が反映されていると言える。

## おわりに

以上、南インドにおける満瓶図の図像表現について、これまでの考察に基づき次のようにまとめることが出来る。

南インドに特有の成道図は、サーンチャー第一塔東門の降魔成道図に描き込まれる満瓶を持つ神々の姿を継承し、ブッダの存在を示す菩提樹と空の椅子、そして情景描写となる満瓶を掲げる神々という三つの要素を組み合わせて構成されている。この表現に直接対応する文献資料は管見の限り見出せないため、仏伝文学に記される満瓶の用途を精査すると、古代インドの世俗的な慣習にしたがって都や道路を清浄にする際に、満瓶が設置されることが判明した。このような記述は、古代インド語文文献に語られる天界の水によって不浄を取り除くという満瓶の本質と結びつく描写であると言える。成道図中に描かれる満瓶は、神々によって掲げられた後、その満瓶の水が空の椅子へ注がれることから、神々の讃嘆・祝福の表現と同時に、天界の神聖な水によって清められた、ブッダに相応しい清浄な場所であることを示すための表現であると解釈することが出来る。

### 参考文献 (アルファベット順)

Agrawala, Prithvi Kumar

(1965) *Pūrṇa Kalaśa or The Vase of Plenty*, Varanasi : Prithivi Prakashan.

安藤佳香

(2003) 『佛教莊嚴の研究 グプタ式唐草の東伝』中央公論美術出版.

荒牧典俊, D. Dalayan, 中西麻一子

(2011) 『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書 (代表: 荒牧典俊)』(科学研究費報告書), 龍谷大学仏教文化研究所.

Bosch, F. D. K.

(1960) *The Golden Germ: An Introduction to Indian Symbolism*, 's-Gravenhage : Mouton & Co., rpt. New Delhi : Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd, 1994.

Burgess, James

(1887) *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayyapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882* (Aechnaeological Survey of Southern India 1).

- London : Trübner, rpt. Varanasi : Indological Book House, 1970.
- Coomaraswamy, Ananda Krishna  
(1956) *La sculpture de Bharhut*. Paris : Vanoest.
- Fergusson, James  
(1868) *Tree and Serpent Worship : Illustrations of Mythology and Art in India in the First and Fourth Centuries after Christ, from the Sculptures of the Buddhist Topes at Sanchi and Amravati*. London : Indian Museum.
- Heeramanek, Alice N  
(1979) *Masterpieces of Indian Sculpture from the Former Collections of Nasli M. Heeramanek*. Verona : A. Mondadori Editore.
- von Hinüber, Oskar  
(1996) *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin/New York : Walter de Gruyter.
- 平岡聡  
(2010) 『ブッダの大いなる物語 下 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』大蔵出版。  
外蘭幸一  
(2019) 『ラリタヴィスタラの研究 中巻』大東出版社。  
逸見梅栄  
(1976) 『古典印度文様』東京美術。
- Keith, A. B.  
(1995) *The Aitareya Āraṇyaka*. Delhi : Eastern Book Linkers.
- Knox, Robert  
(1992) *Amaravati : Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*. London : British Museum Press.
- 肥塚隆  
(1979) 『美術に見る釈尊の生涯』平凡社。  
肥塚隆・宮治昭（編）  
(2000) 『世界美術大全集 東洋編 13 インド (1)』小学館。
- Marshall, Sir John and Alfred Foucher  
(1940) *The Monuments of Sāñchī*. 3 vols. London : Probsthain, rpt. Delhi : Swati Publications, 1982.
- 宮治昭  
(2010) 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版。
- Morris, Richard  
(1884) "Notes and Queries." In *Journal of the Pali Text Society*, pp. 88–89.
- 村川晶子  
(1997) 『Jaiminīya-Brāhmaṇa 第2巻 Gavāmayana 章の研究-2.1-8を中心に-』京都大学修士論文。
- 永田郁  
(1999) 「南インドにおける蓮華蔓草に関する一考察-ローマ帝政期のアカンサス唐草

の受容と展開を中心に」『仏教芸術』246, pp. 13–40.

- (2002) 「南インドにおける「降魔成道」図の魔衆図像に関する一考察 – ガナ型ヤクシャ 図像の系譜 (上) –」『仏教芸術』260, pp. 13–32.

中川原育子

- (1988) 「降魔成道図の図像学的考察 – インド古代初期からグプタ朝まで –」『密教図像』6, pp. 51–73.

Oldenberg, Hermann

- (1979) *Dīpavaṃsa : An Ancient Buddhist Historical Record*. London : Williams and Norgate, rpt. New Delhi : Asian Educational Services, 1982.

Poonacha, K. P.

- (2011) *Excavations at Kanaganahalli : (Sannati) Taluk Chitapur, Dist. Gulbarga, Karnataka, MASI No.106*. Delhi : Chandu Press. (出版年は2011年と記載されているが、実際に刊行されたのは2013年である)

Ramachandran, T. N.

- (1953) *Nāgārjunakoṇḍa 1938, MASI No.71*. Delhi : Manager of Publication.

Ranade, H. G.

- (2019) *Jaiminiyabrāhmaṇam, Second Kāṇḍa (Volume II)*. New Delhi : Indira Gandhi National Centre for the Arts.

定金計次

- (2019) 「インド後期仏教石窟と中期密教 – 『大日経』胎藏曼荼羅の成立地および時期について」仏教学会講演会発表レジュメ、大谷大学、2019年12月6日.

佐藤宗太郎

- (1977) 『エローラ石窟寺院』佐鳥出版.

Shimada, Akira

- (2012) "Formation of Andhran Buddhist Narrative : A Preliminary Survey." In *Buddhist Narrative in Asia and Beyond : In Honour of HRH Princess Chakri Sirindhorn on her Fifty-Fifth Birth Anniversary, Vol. 1*, ed. Peter Skilling and Justin McDaniel. Bangkok : Institute of Thai Studies, pp. 17–34.

- (2013) *Early Buddhist Architecture in Context : The Great Stūpa at Amarāvātī (ca. 300 BCE–300 CE)*. Leiden/Boston : Brill.

Stone, Elizabeth Rosen

- (1994) *The Buddhist Art of Nāgārjunakoṇḍa*. Delhi : Motilal Banarsidass.

Williams, Joanna Gottfried

- (1975) "Gupta Steles of the Buddha's Life." In *Ars Orientalis* 10, pp. 171–192.

略号

**AA** = *Aitareya-Āraṇyaka* see Keith (1995)

**ADN 科研**. = 荒牧典俊, D. Dalayan, 中西麻一子 see 荒牧 / Dalayan / 中西 (2011)

**Burgess**. = Burgess, James see Burgess (1887)

- Coom 1956.** = Coomaraswamy, Ananda Krishna see Coomaraswamy (1956)
- Dhp-a** = *The Commentary on the Dhammapada*, ed. H. C. Norman. 4 vols. London : PTS, 1906–1914, rpt. London : PTS, 1970.
- Jā** = *Jātaka, together with its Commentary*, ed. V. Fausbøll. 6 vols. London : Trübner, 1877–1896 ; vol. 7 (Index, D. Andersen), 1897, rpt. London : PTS, 1963.
- JB** = *Jaiminīya-Brāhmaṇa* see Ranade (2019)
- Knox.** = Knox, Robert see Knox (1992)
- Lv** = *Lalitavistara, Leben und Lehre des Śākya-Buddha, Textausgabe mit Varianten, Metren und Wöterverzeichnis*, ed. S. Lefmann. 2 vols. Halle : Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1902–1908, rpt. Tokyo : Meicho-Fukyū-Kai, 1977.
- MASI 106.** = MASI No.106 see Poonacha (2011)
- MW** = *A Sanskrit-English Dictionary, New Edition*, M. Monier-Williams. Oxford : The Clarendon Press.
- Mvu** = *Le Mahāvastu, Texte sanskrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*, ed. Émile Senart. 3 vols. Paris : Imprimerie nationale, 1882–1897, rpt. Tokyo : Meicho-Fukyū-Kai, 1977.
- Pā.** = Pāli
- PW** = *Sanskrit-Wörterbuch*, 7 Bde., von Böhtlingk, Otto and Rudolph Roth. St. Petersburg : Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, 1855–1875.
- ŚāṅkhŚS** = *Śāṅkhāyana-Śrautasūtra*
- Skt.** = Sanskrit
- s.v.** = *sub verbo*
- T.** = *Taishō Shinshū Daizōkyō* 大正新脩大藏經, ed. 高楠順次郎, 渡邊海旭. 100 vols. 東京 : 大正一切経刊行会, 1924–1934.
- 全集 13.** = 世界美術大全集 東洋編 13 インド (1) see 肥塚・宮治 (編) (2000)

#### 図版出典

- 図 1 肥塚・宮治 (編) (2000 : 挿図 55) を部分拡大して転載.
- 図 2 肥塚・宮治 (編) (2000 : 挿図 110) を転載.
- 図 3 筆者による現地撮影写真.
- 図 4 荒牧・Dalayan・中西 (2011 : 68) を転載.
- 図 5 筆者による現地撮影写真.
- 図 6 筆者による現地撮影写真.

#### 付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 (研究活動スタート支援 : 18 H 05572/19 K 20782) による研究成果の一部である。

## 註

- 1 宮治昭（2010：296-319）参照。
- 2 ガンダーラ地域では、降魔成道図の表現に様々なヴァリエーションが見られる。そして菩提座につく釈迦図や、魔王と娘の誘惑図など、より詳細な場面の図像化も行われているが、単独の成道図は見られない。宮治昭（2010：324-331）参照。  
また、栗田功（2003：293）は、ガンダーラ地域から成道図が出土していないことについて、成道の出来事は、内面的精神的な出来事のために図像化することが難しく、成道の前後の物語で成道をも表現し、すぐ前の降魔の場面が、一般に降魔成道といわれているのはこのためであると解釈する。
- 3 Coomaraswamy（1956：Fig. 23, Fig. 26）パールフットの成道図については、宮治昭（2010：297-299）を参照されたい。
- 4 Marshall and Foucher（1940：vol. II, Pl. 40, 3）
- 5 フーシェは、この壺を香水で満たされた壺としている。Marshall and Foucher（1940, vol. II, Pl. 40, 3）
- 6 Knox（1992：163）*Two standing male attendants flank the throne, each supporting a pūrṇaḥaṭa or vase with lotuses on their raised left hands.*「立っている2人の男性従者（供養者）は玉座の両側面に位置し、各々がその掲げた左手で *pūrṇaḥaṭa* すなわち、蓮華入りの壺を支えている」
- 7 『一切経音義』[T. 2128, No. 54, 437 b 2]、『悉曇要訣』[T. 2706, No. 84, 551 a 2]に、徳者の相の一つとして挙げられている。（その他の徳者の相は、卍、赤蓮華、法輪、杵など）
- 8 逸見梅栄（1976）は、サンスクリット語 *Badrakumbha* の対応訳として賢瓶とする。
- 9 永田郁（2002：28-29）の南インド「降魔成道」図一覧もあわせて参照。そのうち成道図は、No.17、18、19が該当する。
- 10 例えばパールフットでは、欄楯柱や笠石の円形区画に、壺から溢れ出す蓮華の表現が見られる。Coomaraswamy（1956：Fig. 125, Fig. 126）
- 11 壺の底部にみられるうねりのある葉文は、カナガナハハリ大塔から出土した上段レリーフ石板 27/18 の付け柱（左側）上部に描かれる満瓶図にも見ることが出来る。荒牧・Dalayan・中西（2011：76）、Poonacha（2011：412, Pl. CVIA）  
このうねりのある葉文は、ローマ帝政期のアカンサス唐草に由来する。永田郁（1999：19-32）、肥塚・宮治（編）（2000：159）を参照。逸見梅栄（1976：134）は、この葉文の意味は、瓶流出の水波を意味するものと解釈する。
- 12 アマラーヴァティー大塔から出土した巨大な満瓶の意匠は、2018年にアーンドラプラデーシュ州のエンブレムに採用された。エンブレムの中央に蓮華入りの壺の線画を見ることができる。参照アドレス（<https://www.thenewsminute.com/article/andhra-gets-new-official-state-emblem-inspired-amaravati-art-91577>）
- 13 肥塚・宮治（編）（2000：160, 挿図 109）
- 14 テランガーナ州立考古博物館蔵のチャンダヴァラム出土の類例は「*Pūrṇakumbha*」と題されることを現地にて確認した。（2019年2月20日（水））

- 15 その他、出土したばかりの壺の状態を Ramachandra (1953 : Pl. 23 A, 23 B, 24 A, 24 B) に確認することが出来る。
- 16 その他、ナーガールジュナコンダ出土の仏塔図には、仏塔の平頭に最も近い神々が空中で満瓶を掲げている姿が見られる。Stone (1994 : Fig. 145, 151)
- 17 肥塚・宮治 (編) (2000 : 159・図版解説 23) の作品解説では、満瓶が繁栄・増殖・吉祥の象徴であると記される。
- 18 Oldenberg (1979 : 151-152) を参照。『ディーパヴァンサ (島史)』第 14 章第 30 詩節にも同様の内容が記される。
- 19 PW, MW の *pūrṇaḥṭa* での登録は無い。
- 20 『ジャイミニヤー・ブラーフマナ』における Gavāmayana 祭については、村川晶子 (1997 : 3-12) を参照。
- 21 JB 2. 404-405 では、頭に満瓶を掲げた女性たちが Mārjālīya 焔を「*Haimahā Haimahā*」という言葉を唱えながら周回し、満瓶の中の水を天界の水にしたことが詳細に述べられる。Ranade (2019 : 1084-1087) の訳を参照。
- 22 Keith (1995 : 268-270) の訳を参照。
- 23 その他、仏伝文学中に記される満瓶は、誕生時の神々の祝福表現にも登場する。『過去現在因果経』[T. 3, No. 189, 625 c 2-3]、『普曜経』卷第二「降神處胎品第四」[T. 3, No. 186, 495 a 5-6]、『方廣大莊嚴経』卷第三「誕生品第七」[T. 3, No. 187, 551 c 6-7, c 14-17]、『佛本行集経』卷第八「從園還城品第七上」[T. 3, No. 190, 691 b 13-14] など。
- 24 *Lalitavistara*, ch.19 (Lv, 283, 4) = 『方廣大莊嚴経』卷第八「詣菩提場品第十九」[T. 3, No. 187, 586 c 15] 外薊幸一 (2019 : 282, 593) を参照。
- 25 *Mahāvastu* (Mvu ii, 264, 15-265, 6)、平岡聡 (2010 : 7) を参照。
- 26 『佛本行集経』卷第二十六「向菩提樹品中」[T. 3, No. 190, 773 c 4]
- 27 カーラ龍王の讚嘆場面に現れる満瓶の図像表現は、アマラーヴァティー大塔に二例 (Fergusson (1868 : Pl. 67) Knox (1992 : Pl. 63))、ナーガールジュナコンダに一例 (肥塚・宮治 (編) (2000 : 挿図 130)) 現存する。同主題については、今後の研究課題としたい。
- 28 中川原育子 (1988 : 62-64) を参照。  
「菩薩、答へて言く、「我の果報、唯だ此れ地のみ知る」此の語を説き已りて、時に大地、六種に震動す。是に於いて地神、七寶瓶を持し、中に蓮花を満たして地より踊出す」  
『過去現在因果経』[T. 3, No. 189, 640 b 13-15]
- その他、『方廣大莊嚴経』卷第九「降魔品第十九」[T. 3, No. 187, 594 c 24-28]、『佛本行集経』卷第二十九「魔怖菩薩品 下」[T. 3, No. 190, 791 a 21-26] に対応箇所がある。
- 29 サールナートの降魔成道図については、肥塚隆 (1979 : 挿図 80)、肥塚・宮治 (編) (2000 : 挿図 153)、Williams (1975 : fig. 2) の三例を参照。
- 30 佐藤宗太郎 (1977 : 挿図 86)、定金計次 (2019 : 2) を参照。

- 31 その他、四門出遊の場面を説く『佛本行集経』卷第十四「出逢老人品第十六」に「其の諸街巷、四衢の道頭に、満瓶水を置く」[T. 3, No. 190, 720 a 2-3] とあり、シッダールタがカピラヴァストゥの城外へと向かう道路を、シュッドーダナ王の命令で事前に飾り立てたことが記されている。
- 32 von Hinüber (1996 : 135 = § 296, n. 467)